

平和とは何か

多摩市立南鶴牧小学校 6年 大塚 篤志

私が子ども被爆地派遣事業に参加したいと思ったきっかけは、本やテレビで、たった一つの爆だんが20万人もの命をうばうということを知り、「爆だん一つでこんなにも多くの命が失われるなんて、信じられない。」とおどろき、実際に被爆した現地である広島で、原爆のおそろしさについて理解を深めたいと考えたからです。

派遣員の皆と初めて立った広島の地は、今も原爆の傷あとが残っているだろうというイメージと違い、駅前はマンションやビルが立ち並ぶ都会で少しおどろきました。けれども平和記念公園を見学したり、原爆ドームを目にしたりするうちに、79年前に広島に原爆が落とされたという現実を実感しました。

広島平和記念資料館で、被爆により黒コゲになった三輪車を見た際は、私の2才の弟のことを思い出し「この三輪車に乗るような弟と同じ年くらいの小さな子が原爆のぎせいになってしまったなんて、なんとざんこくなのだろう。」と、心が痛みました。

高村さんという被爆者の方と交流した際、高村さんはおだやかに自身や家族の経験を語ってくれました。その姿を見て、悲しく、思い出したくないことを話すことはつらいはずなのに、同じ過ちがくり返されないよう、私たちに伝えてくれていることに感謝の気持ちをいただきました。

灯ろう流しに参加した際は、川に流れてゆらゆらとゆれる灯ろうのあかりが、とてもきれいで、戦争や原爆で亡くなられた人々の魂をなぐさめているようでした。私は「二度と同じことがくり返されないために、自分にできることは何だろう。できることをしなくては。」と思いながら灯ろうを流しました。

私は、派遣事業に参加する前は、平和というものを特別で少しかた苦しいものだと考えていました。けれども、今回様々経験をしたことで、考えが少し変わりました。平和とは、それほど大げさなものではなく、住む場所があり、ご飯が食べられ、家族や友人など大切に思える人がいる、自分が当たり前に過ごしているこの毎日だと思いました。戦争や原爆はその当たり前を一瞬にしてこわしてしまうおそろしいものだということを今回の経験を通じて改めて学びました。

平和記念式典では会場の皆が平和を願い、気持ちを一つにしていることが伝わってきました。世界では未だに戦争が起きています。それは、自国の利益を優先したいという勝手な考えや平和の大切さを忘れてしまっていることが原因ではないでしょうか。

私は、派遣事業を通じて得た学びを家族や友人など一人でも多くの人に伝えています。そして、相手の考えにも耳をかたむけ、様々な人と平和について一緒に考える機会をつくりたいです。